釜瀬春芳著

# 吼ゆる心像

第二版が出來ました

定價壹圓

發賣所

廣島市八丁堀二六

光明團出版部

振替下關二三〇八番

大正十四年七月一日第三種郵便物認可
昭和六年一月十五日發行（毎月一回十五日發行）

光明　第十三卷第一號　定價一部十錢

光明　第十三卷第一

物　住岡狂風
希有人群像——最難戰地の人々　住岡狂風
教行信證——第十七願文　住岡狂風
轉換期に於ける信仰狀態の心理學的考察　吉藤智水
聖戰錄

大日本真宗　光明團本部發行

# 光明

第十三卷
第一號

## 合掌宣言

一、我は之れ久遠劫來の業苦に惱む。されど傷つき痛み惱める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

二、我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、四惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘ましき輪廻の旅人、知らせん哉。彼の内に流れ給ふ永遠の光明。聞かせん哉十方に響流し給ふ招喚の勅命を。

四、希くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

五、「四海の信心の人は皆兄弟。」其處に共存の涙わく。共に和らぎ慰藉し、篤勵して相愛に生きん哉。

## 本領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。

念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救濟のために、熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために濁亂の社會に猛進せよ

# 謹賀新年

## 光明スピリット

『其靜かなること　林の如く
其速きこと　風の如く
侵略　火の如く
不動　山の如し』

大信に生きる我等の生活は、生死動亂に處するに靜かなること林の如くし、事に處する風の速さを用ひ、濁亂の世に内外の惡魔を侵略するに火の熱烈に習ひ、困苦逆境に立つて山の如く動かず。これはこれ光明團精神（スピリット）！　これ眞の力の人、合掌念佛すれば佛我が内に白熱したまふ。

# 物

住岡狂風



――年頭希願――

三人の兄弟があつた。三人はそれ〴〵不思議な魔術を習つた。魔術を知つた三人が集つた。そうしてその術を自慢し合つた後、腕くらべをすることにした。先づ甲は自慢ながらに獅子の骨格を造つた。さうしておいどうだといふやうな顏をした。乙は、では俺はといふのでその骨格に肉をつけた。獅子が出來た。丙の番が來た。彼は更にその獅子に生命をふきこんだ。動かなかつた獅子は動き初めた。さうして吼えはじめた。その本性を發揮して見るまに三人にとびかかつて三人を喰ひ殺した。

汽車、汽船、飛行機、毒瓦斯、電車、自動車、大砲、機關銃、……等々……而して貨幣。

それらが一体我等を生かすのか殺すのか。

今や世界は『物』によつて苦しむ。

『物』が人間を本質的に幸福にしないで、物によつて虐げられ、物によつて斃される。

心が物の世界を決定しないで、物が心の世界を左右する。人間の心の不可思議なる能力が造り出した文明といふ獅子によつて、造つた人間が嚙み殺される。人が物を使はないで、物が人を使ふ。物が人よりも優れた地位にある。

物の動き物の動きの中に一つの法則がある。物は如何に動いたか。其處に道義がある。其處に社會がある。其處に眞理がある。

飽くことなき貪欲の心、この心が人間の心の王座を占める間人間の世界に平和はない。さうして人間とは貪欲それ自体のことだ。嚴かなる法庭に人の子の罪を裁く判檢事も捧給の問題になると結束して立つて險惡なる空氣の中に猛烈なる反對運動に成功する。

飽くことなき貪欲が、物を集めることに興味を持つ。他人が泣かうが苦しまふが、自樂のためには他人の慘情には眼をふさいであらゆる手段を用ひる。さうして其物に苦しめられながら地獄の火炎の唯中に沒落してゆく。

釋尊大無量壽經に曰く『尊となく卑となく、貧と無く富となく、少長男女共に錢財を憂ふ。有無同じく然り、憂思まさに等し。屏營として愁苦し、累念積慮し、心のために走使せられ、安き時あることなし。田あれば田を憂ひ、宅あれば宅を憂ふ。』

有るも憂ひ無きも憂ふ。

我等の現實の眞相の曝露ではないか。

貪欲の心を無制限に働かして生きてゆく以上、物は永久に『憂』をもたらす獅子である。物が人間のための淨土には變らないのか。

或る耳鼻科の醫院では、耳の手術中に大手術らしく見さすために『大きな音をさせよ』と醫師が看護婦に命じた。やがて手術科五十円が請求された。患家には支拂ふべき金がなかつたので、其娘を買つて其支拂ひをすました。

或る所では二ケ年間も續いた小作爭議が解決された。それにたずさはつた人の話である。『慾』より外には如何なる心も持合せのない女の地主が小作の田をとりあげた。それから問題が發生してあらゆる醜狀を描きつゝ事件が込入つて、終には刑事問題までひき起した。小作の解決條件の一はかう云ふのがある。『自分の作つてゐた田をもとにもどして作らすことそれと一緒に隣の權が作つてゐる田をとりあげて一反幾畝を自分に作らすこと』と云ふのである。

若しこれを許せば『權』は更に小作爭議を超す。さうしてその解決條件に『八』が作つてゐる田をこちらにと出張して二年間『八』は更に熊の田を……　爭議は何時になつたらすむのか。慾と慾との大闘が集つた時かうした醜狀以外の何があるか。

或る女の人が自分の生んだ男の子を、一生懸命になつて、女手一つで育てゝ行つた。そして其男の子が二十になりやがて徴兵檢査を受けた。其時になつて、男の子は自分の子で自分の籍に入つてゐた筈だつたのに、何時のほどにか男の親の籍へ入つてゐる。女は自分が精を入れて成長させた息

子が何時のほどにか男のものになつてゐるので、驚いて男に交渉すると、金を出せば籍をやるとの非道な云葉である。やむなく幾十圓かのお金を出して息子の籍を自分の方に入れた。だが男の無理難題はそれだけではなかつた。それからこの男の親は、毎月々々この育てぬ子供から金を搾り取ることを初めた。三十圓、十圓、五圓、惡魔にとりつかれたやうに、どこまでも男の子の弱さにつけこんでとりつくしはじめた。その金は皆なその男の酒代になつた。青年は妻を迎へた。どうしても責められおどかされて金を出さねばならなかつた。その男親が病氣になつた時は、其療治費まで出さゝれた。五年、十年、そして四十にも近づくやうになるまでにはとう〳〵家も田も山も人手に渡つてしまつて無財産になつた。人間なるが故に、時にはこの非道な父親を殺してやらうかと思つたこともあつた。或時は恐迫狀を種にして、お上の裁きの庭へ訴へて出やうかと思つたことさえあつた。然し弱い彼はそれすらすることが出來なかつた。とう〳〵生れた田舍を捨てゝ今はY市に出た。この街に出てからも父からゆすぶられることに變りはなかつた。この苦惱は彼の一生を幽鬱なるものにしたが彼はやがて信仰の道に入つた。さうして今では苦しい中にも一縷の光に生きてゐる父が來た時お酒を出すと『お前は何と云ふ親孝行人だらふか』と流石に鬼のやうな父も涙することがある。『お父様。あなたも佛様の道に入つたらどうですか』と云ふと『何、佛教かそれなら俺に問へ俺は寺の坊主どころじやないよく知つてゐるぞ。』と云つて理窟をならべる。全く手の出しやうがない。彼は今でも二本も三本も金を送れと手紙がくれば依然として送金してゐる。養つてくれたことのないこの非人道な酒のみの貪慾な父親に。

深い無明の世界に飽くことなき貪愛にたゞれて、子供までジリ〳〵喰ひつくしてゆく。これがこの儘でよいのであらふか。晃々たる靈性のさめざる限り、この男はそのまゝに鬼ではあるまいか。

この不景氣に街にも田舍にも食へない人たちがあふれてゐる。特に農村の疲弊はその極に達してゐる。或村では寺の門の新築建立が計畫されて二萬圓の立派なものが建てられた。門徒一軒が米一俵づゝ出してくれたら建てられるのだからといふのが院主の意見だつた。だが、平均米一俵搾るためには二百円も三百円も出す人がなければ集るものではない。

我等も決して宗教のためにその道場の不必要を叫ぶものではない。然し二万円の金で建てられた

門が何を生むのか。寺の美觀といふ以外には何等の生産的な意義の必要もないものだ。そして稅金さへ出されない農民たちが如何なる生活をしてゐるかを知りつくしたら、或は又天下に今、何が叫ばれてゐるのか、時代の聲が何であるかを知つたならば、この院主は顏を赤くせないではゐられないであらふ。

二萬圓の金があつたら、立派な講堂が小學校に與へられる。

大量生産の出來る印刷屋で一冊五錢の書物を造れば可なり厚いものを刷つてくれる。五錢の本だつたら四十万冊出來る。四十万冊天下に配本したら隨分の反響を生むことが出來やう。食ふに困る人を一日二十錢で養へば、二十万円あれば十万人を一日養ふことが出來る。

二万円の門を建てる變りになぜ、彼が信ずる大法のためにこの資力をそそがないのか。有形の門よりも無形の門を建てないのか。

さうしてこの門は如何なる心が建立させたのか。この門が正法の輝きを意味するか。大法の沒落の記念塔なのか。

或る寺では住職の繼職披露の大法會が營まれた。米一升十三錢、一円だつた繭が二十錢、その田舍の村で二千圓の金が集つたその金は五日の間に使はれた。何等意義のないジャズ的な騷動の際中にかうした事柄を村の青年たちが如何なる眼で見てゐるのか。村が可愛かつたら、日本といふお國のことが少しでも心配だつたら、大法宣布の使命を感ずるなら、社會の動きを見るならば、自分たちの足塲がわかるならば、どうして『物』の動かし方について徹底した考へを持たないのか。

光明團本部では一月元日二組の結婚式が佛式で營まれた。本部員や其一屬ばかりである。

司婚者である私に紋服がない。年賀にまはる市内團員の羽織を一寸拜借。

新郎新婦四名の中、

着のみ着のままで、平常のより外に着がへ一枚持たぬものが大部分、結婚だとて銘仙一枚出來るのではない。勿論紋付羽織を持つた者がゐやう筈がない。

二十円出したらいい羽織が一枚出來る。百円の餘裕でもあつたらせめて一枚づゝでも……

いいえ米代すら支拂へぬ會計で何が出來やう。——

愚痴一つ云ふではなく、皆な朗らかな心と顔色『相濟まない！』金持をうらむのでもなく、貧しい中での奉仕を鼻にかけるでもなく、かうして一團となつて働らいてくれる皆を思つた時、沈默の涙以外に何があらう。

おい、今のまま富む日を豫想することなく、餓える日には一緒に餓え、笑ふ日には一緒に笑はふ

物は生きてゆく上に欠ぐべからざるものだ。然しながら物にむかつて貪慾である心からは不平と愚痴しか生れない。

正しい念ひに住せよ。

大法に道義に願生しやうとする心は、限りなき貪愛を越えて、使命の自覺と、金剛不壞の信念との中に、不滅の光悅と微笑とを惠むであらう。

# 希有人群像 4

## 最難戰地の人々

廣島市を大田川に沿ふて上ること十五里、其處に戸數二百の小さい町がある。山縣郡戸河内村の首府、本郷である。この地を中心に我が光明團戸河内支部がある。我等は異常の公憤と、感激と、歡喜と、そして慚愧とをもつて、同地の同志の血みどろの奮戰を天下に紹介する。

三浦小八君

田淵寅一君

河本一郎君

森本彦次君

丸山茜造君

山根治三君　等々

我が光明團が戸河内村本郷の道教寺に入つて婦人會主催の講演をしてからはや五ケ年の年月を經過した。一度我が光明團がこの地に現はるゝや、若人たちは擧つて起つて光明團支部を設立した。初めは反對も比難もないやうであつたが一度青年男女が團旗の下に走るや、青い嫉妬迫害の魔の手は極めて野卑に露骨に支部の上に其鋭い爪牙を磨きはじめた。

平凡人は顏を惜しむ。無意味な比難を恐れ、無責任な稱讃をよろこぶ。

四ケ寺の寺院は高座に上る講師をして、あられもない聞くに堪えない惡罵をあびせかける。數人の僧侶が夕飯酒幾升、泥の如く醉ひしれて高座に上り、根も葉もない彼等自身の錯覺の上に立つて聽講者の全てが眉をひそめるやうな狂態を演じつゝ光明團樸滅のための惡罵を五晝夜もつゞけてなげかけられたこともあつた。かうした下手な野卑な迫害は依然として續けられて來た。さうしてここに五年間を經過した。非人間のやうに異端者のやうに、虐げられつゝも、其中をよく忍從して來た君たちの奮鬪は涙ぐましいものであつた。



私たちも矢張り人間なるが故に、人に褒められることが嬉しかつた。罵られることが嫌ひであつた。けれども唯一つ信ずることをまげることの出來ない心を生みつけられた。さうして十幾年この心の命ずるがまゝに歩んで來た。其苦鬪は遂に如何なる、迫害惡罵の中に立つても何ともない大膽なる態度を取り得る準備をつくり得た。――光明團の團員は強い――さうした定評を得るほど各地の同志はかうした常識の世界を生きる人の間に強くなつた。強くなるとは、毀譽褒貶を超えることだ。毀譽褒貶を超えやうと思へば、無實なる惡罵に、適當しない攻擊に泣いて泣いて泣きつくした苦しい幾年かの休驗の中に、眞の信が力となつて培はれなければならない。苦しい境遇は力を内に充實せしめる。

農家が秋、籾を純粹にするためには、とうみにかける。風の力が實の入つた米と殼とを選りわけるのだ。風がない時には、實のあるものも空籾も雜つてゐられる。然し一度風が吹けば斷じて一緒に雜つてゐることを許さない。止まるか飛ぶかだ。君たちはあらゆる風にふきとばされても飛ばなかつた。充實した實なのだ。村の常識的な人たちからは馬鹿者でも、我等から云へば最後に殘つた寶石なのだ。

目覺たる者は僧侶だつて、既成教團、寺院宗教が崩壞過程をとりつゝあることを云つてゐるじやないか。都會をはなれた田舍だとは云へあまりにも我執嫉妬が强く、あまりにも頑迷だ。お隣の筒賀村では、寺院の本堂を光明團のために開放してゐるのに、これはまた何といふ囚はれだ。宗教とは信仰とは、本堂の中での說教のことか或は又乎等自身の生活の唯中に生きて輝く事實なのか。今やゴウ〳〵たる宗教否定の論陣の唯中に其阿片性の全てを淸算されてゐる時に、これは又何といふ迷妄の眠りか。

天下の至る所を堂々歩み得る光明團が何故に戸河内においてだけは異端者なのか。

でもいいじやないか。痛快じやないか。百人おれば百人、千人おれば千人が承認する世界は、常識だ。功利的觀念を一歩も出でず、眞佛と偶像の見わけがつかず、大きいといふことを正しいと間違へ、本質とそれについたサビとを兒別けず、本尊の生命よりも、地上の教權を高次の立場において、まるで魂の聲のしびれた者にどうして祖聖の血のにじむやうな歩みがのみこめやう。我等は祖聖に感心して其の見物者になるよりも祖聖の歩みたまひし道を歩み、祖聖の歩まんとしたまひし道



を歩まうと求めなくてはならない。

私どもは法兒たちの其數年の默々〳〵の精進に合掌しないではゐられない。

他府縣他の地方では白日のもとに堂々、青年へ智識階級へと勇ましく進出し得る光明團が、戸河内では又この難戰苦鬪だ。この地に運動を支持する法兒たちの苦節五年の苦悶憂鬱に同情する。然し笑へ。さうして死守せよ。默々の努力、やがて日本がどう轉廻するのか。活目して十年二十年後の日本を見よ。

罵られても罵つてはならない。

打たれても打ちかへしてはならない。

攻擊されても攻擊しかへしてはならない。辯解してはならない。

決して我慢にむかふに我慢をもつてしてはならない。怒りにむかふに怒りを持つてしてはならない。

唯默つて一道を進め、どんな深い世界でもわかる人になれ。兩足で打たれる人になれ。風が吹い

ても倒れない大樹になれ。生活實踐の中に無言の何ものかを生かせ。然し腐つたものと決して妥協してはならない、

それが我等のモットーだつた。我等は今や五週年を迎へた。我等は我等自身の歩みについて內省しなければならない。反省する時諸君の歩みの全部がよかつたとは云へない。眞教寺の說教がある際中に其すぐ下の青年會館で、支部の主催で長尾哲磨氏の講演會を開いたのは惡かつた。或は同氏の口から假令、個人關係の不道義があつたからとてそれを公衆の席上で惡罵したことも惡かつた。相手がやるからこちらもやると云つた態度は斷じていけない。それは事勿れ主義のためでも弱きが故でも死の平和のためでもない。破邪必ずしも顯正ではない。顯正さへすれば必ず破邪はその中にある。正しさだ。正しさだ。正しさのみ最後の勝利である。再びさうした邪道に陷つてはならない一切を超えて必然の道を歩むのだ。默つて歩むのだ。

宗教とは說教師の聲の善惡ではない。心の中に開く智慧の眼だ。靈肉の上に動く如來の願心だ。山の中に、畑の中に咲く華だ。安住の信樂の天地だ。如來にまで創造きる欲生の歩みだ。善に對してもつと大膽になれ。千枚張りになれ。綜鬱は日本擧げての輿論が彼の上に大彈壓を與へた日に急いで降參して叡山に逃げこんだか。

いいじやないか。若し一切群生が求めるならば、ふまれたゝかれ斬りさいなまされてもよろこんでこの全体をさらけ出して與へやうではないか。もとより一切衆生の前になげ出した体だ。

世間では光明團は一種の宗教革命運動だといふ。私は知らない。たゞ然し光明團の本營にはこの運動によつて社會的地位を求めたり、物質的な安樂や、蓄財やを望んでゐるやうな者は一人もゐない。因襲と迷妄とに深い眠りをつゞけてゐる者の間で全否定の法刀をぬけばこれ位のことはあるのが當然だ。怒つてはならない。愚痴つてはならない。妥協してはならない。高慢になつてはならない。朗らかに笑へ、大膽に歩め、如來は其智慧光によつて永遠に生死を超えて彼岸に招喚したまふてあるではないか。我等の現實の背後には法藏の大悲の願心が念じつゞけられてあるではないか。ゆけその道！　歩め其道、無碍の一道を。

# 教行信證講話　十七

## 第十七願文（つゞき）

住岡狂風

（本文）

『設ひ我佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずば正覺を取らじ』と

### 講話

#### 前號の大意

大無量壽經には如來の四十八願を說いてあります。其四十八願中の第十七願が即ちこゝにかゝげた諸佛稱名の願であります。阿彌陀佛の因位法藏菩薩は、十方無量の諸佛の前に拜跪して『私が佛になつた時、十方無量の諸佛が、悉く咨嗟て我が名を稱へるのでなかつたならば、佛たる正覺はとらないと誓つたのであります。即ち法藏が阿彌陀佛たるか否かは十方無量の諸佛が名号を讃嘆するかしないかによつて定まるのであります。

私は本月号から新らしく聖光より變つて光明の讀者になつた方のために、前号に出したことをでも今一度出して述べねばなりません。

一休宗教及哲學に於いて、神を說きます時、三通りの世界があります。即ち

多神論
一神論
汎神論

であります。死んでから極樂にゆくためには阿彌陀さん。緣結びは出雲の大社、海路平安は琴平神社、眼病なら一畝藥師、こんな具合に多くの神佛があるやうに思つて功利的に信仰する者の精神狀態は多神論であります。水の神、火の神、柱の神、太陽の神、山の神……さうした多くの神を考へてゐる者は大都會の唯中に一番多いやうです然しかうした人間は体は文明の中にゐても心は野蠻人と同じ無智に迷ふてゐるのであります。

つぎが一神論であります。キリスト教が其代表であります。天地造主の神が一人だと叫んでゐます。これはなか〳〵進んだ考へで多神論者が賢くなると一神論者になります。

然し釋尊はこの天地創造神をも打くだきました。さうして彼自身の世界に立上つて自ら如來だと叫びました。さうして彼のこの正覺の内容こそ、涅槃でありました。一切の經典はこの体驗の内容たる涅槃界の實相を說いたのに過ぎません。涅槃界はまた、これを眞如界とも申します。

この眞如界こそはこの十方無量の諸佛の天地であります。この萬有こと〴〵く眞如常恒の光に輝く眞如界こそ、生死の苦海に願行する法藏菩薩の本地であり、眞實の大道を往生する衆生の故鄉であります。

法藏菩薩は實に久遠の眞如界より來生して一切衆生の上に本願を廻向成就して、限りなき淨土を莊嚴する唯一の力でありますこれが前号の大体でありました。

## 十方無量の諸佛

親鸞聖人の『入出二門偈』の中には『無碍の光明は大慈悲なり。この光明は諸佛の智なり。』とあります。無碍とは盡十方無碍光如來のことでありまして、この無碍光如來の無碍の智慧がそのまゝ十方無量の諸佛の智慧であるといはれるのであります。即ち十方無量の諸佛が諸佛たり得るにはこの無碍光如來の智慧光に輝くことによつて成立するのであります。この智慧光は現實の大地にあつては、そのまゝ法藏の大悲本願であります。法藏の願心が動く所。そこに十方無量の諸佛が生れるのであります。畢竟、十方無量の諸佛はこの盡十方無碍光によつて顯はれ、十方無量の諸佛が同一の名号願心によつて諸佛たることによつて阿彌陀の正覺は成就することを誓つたのが、この第十七願なのであります。

## 名號成就と正覺

十方無量の諸佛……　盡十方無碍光如來(阿彌陀佛)……　法藏菩薩……　この三つは結局は三にして一でありますが、それがなか〳〵のみこめないことであります。まづい譬へでいへば、太陽を盡十方無碍光如來とし、大地の山川草木を十方無量の諸佛とします。今太陽は大地の上に限りなき惠みを與へます。これを智慧光とします。而して今太陽は大地の上に、春(淨土)を莊

厳しやうと致します。それが彼の誓願であります。如何にして大地に春を荘厳するか、それは、現實の大地の底から力が動かねばなりません。春は大地の底から動かねばなりません。この大地に動く力を、法藏の本願といたします。大地の底に沈潛する法藏は『私が春を成就いたしますのに、この無量の山川草木の全ての方々が、春だ春だと春といふ名号を讃嘆して下さるのでなかつたならば私は春といふ正覺はとりません。』と誓ひます。やがて太陽の光は大地を惠み（大慈悲）となつて現實の力となります。さうして萬物は個性のまゝが、柳は綠、花は紅、草も木も山も川も人も、芽を出し、花をさかせ、色々な相にもえ出でます。萬物全て春を名告らないものはありません。

萬物は力に動きます。あの柔らかな蕨までが堅い大地を破つて春だと叫びます。こゝに春は全く萬物によつて荘厳されるのであります。光は天上から一切を招喚します。力は大地の上に動きます大地の全ては太陽によつてのみ存在します。太陽の誓願は萬物の上に成就します。

それと同じく、無碍光如來の智慧光は十方無量の諸佛の上に、無量壽、無量光の叫び（名号讃嘆）を成就することによつて、其正覺が成就します。無量の諸佛が名号を名告ることによつて法藏の本願を滿足して正覺阿彌陀となるのであります。

法藏は四十八願中、第十七願、即ち無量の諸佛にむかつて、はじめて『名号』を出しました。我が名の成就を誓ひました。名号が歌嘆せられるのは實に十方無量の諸佛の天地においてであります

今親鸞聖人は行卷において、我等衆生の大行（大行とは無碍光如來のみ名を稱するなり）がこの十七願より出でたるものであることを觀破し、叫ばれたのであります。即ち我等衆生の念佛はそのまゝ如來の願心によつて叫ばれたる、佛の名告そのものであります。『我となへ、我聞くなれど南無阿彌陀つれてゆくぞの彌陀のよび聲』の歌はこの風光を語つたものであります。

## 大　行

十方諸佛も無量であり、十方衆生も無量であります。衆生をはなれて諸佛もなく、諸佛をはなれて衆生もありません。されど我等は輕率に如來を我等の上に肯定してはなりません。然し釋尊は念佛の人を諸佛同等と申しました。畢竟、菩藏の彌陀三昧の對象は十方無量の諸佛の眞如界であり、菩薩の大悲の對象は十方無量の衆生であります。一つは光明界であり、一つは一点の光なき生死無明の苦海であります。如來は限りなき暗である生死衆生の上にこの名號を廻向して彼の安樂淨土を

莊嚴する菩薩たらしめやうとするのであります。衆生はこの大行によつてのみ、凡夫のまゝがよく不退轉の菩薩となるのであります。彼は如來の本願に生きるからであります。衆生はこの名號を聞信することによつてよく佛國土を莊嚴する願生淨土の衆生、即ち最高の菩薩位に即得往生するのであります。この大信が發露する時、念佛の大行、即ち十七願の名號が衆生のものとなるのであります。

## 平等

本來平等であるべき人間社會に極端なる差別ができますと、社會は危險狀態になります。其時は目覺めた新らしい階級がたぼけた優柔な無道義な無氣力な階級をけとばして再び平等な社會を造ります。これは自然の理であります。

# 両足尊

往岡狂風

### 永遠輪廻

我等は生死の海底に限りなき苦惱をつゞけてゐます。假令我等の世界に相對的な自由や開放や便利や滿足が與へられても、第一義的意味において、大地は永遠に苦惱そのものであります。釋尊が說かれた『苦諦』の文字や親鸞聖人によつて叫ばれた『生死の苦海ほとりなし』の宣言は悲しいことながら現在までに、私の前で如何なる社會科學者も哲學者も一人だつて壞してくれた人はありませんでした。『何に！　力と賴んだ子供が急死して人生が暗くなつた。……　何に！　病氣して体が片輪になつて人生が暗い……　何に！　生れつき頭が惡くて勉强が出來ないので人生の落伍者になつて泣いてゐる！　そんなことは個人問題だ。社會の大局の問題じやない。その人だけの問題だよ。大体社會の苦は富の生產關係及其分配關係等によつて左右されるんだよ。だから

その土台の問題を棄てゝおいて個人問題などにかゝはつてゐるのが認識不足といふものだ……』富の問題の解決、社會組織の改造それによつて我等の世界に相對的自由や開放の生れることを信じます。そしてそれは人類のなさねばならぬ重要な歴史的問題でもあります。然し我等はこれによつて第一義的な問題に解決を滿足するまで與へられることが出來るでありませうか。永劫の苦海である大地にそれだけで滿足するでせうか。不具になつたり、子に死なれて人生が味氣なくなつたり、頭が惡くて名譽欲の滿足が出來なかつたりする。さうしたことは個人問題にちがいない。然しその個人問題が形こそ違へ、萬人に背負はされ、與へられてゐるのではありますまいか。私どもは可憐な人間の生活の營みの中に永劫輪廻の相殺の悲劇や、地獄の相や餓鬼や畜生の相を見ないではゐられませぬ。闘爭はさけられませぬ。然しそれは痛ましい非理想的な事實であることに變りはありません。『皆な永劫輪廻の苦海の事實なのだ！』その佛陀の大悲のみ云葉を味はないではゐられませひ。

一個の苦惱が万人を代表し、一個人の罪惡が万人に通じ、一人の煩悶が世界を象徴することを思つた時、我等は簡單にかたづけることができません。耳をかたむけ心をよせて一切人の苦惱に同感する時、我等は何を求め、何を願ひ、何を欲するかを知らされます。其處に我等は『生命の絶對自由意志』の叫びと求めとを知る者であります。

先日も其昔親しかつた私と同年輩の人の自動車との衝突致死の報に接しました。たつた十一月にはこのつぎにお出でを待つてゐますと云はれた方の死の知らせを受けました。そして河内驛での汽車轉伏のあの悲慘事が天下の耳目を震憾せしめました。

『死！』は我等のあらゆる營みに『無價値』の宣言を與へます。我等は『死なんて當然だよ、そんなことが俺たちの問題たり得るか』といひ得らるゝ英雄？　とはあまりに遠くへだゝつて深い關心を諸行無常の上に持たざるを得ないのであります。

けれども亦死するが故に人生の營みは全て虚無だといつて懐疑の中に自殺するにはあまりに深い魂の願ひの聲を聞きはじめました。

我等はこの第一義の大問題に對して明確な斷定と、衷心の滿足と、生の勝利と、ゆるぎなき安心と、血税を支拂つて生きるに足る價値の認識と、苦惱を超克する力とを與へられなければなりません。而して宗教が人類の本能的要求であつたのはかうした生命の願ひのためでなければなりません

如來が何であるかを考へるまへに、私は人間の宗教心について考へなければなりません。

昨年六月私は大阪市に行つて約半ケ月を暮しました。さうして大阪人の様々な様子を見聞しました。一日人を待つために淨正橋の停留所に立つてゐます一時間の間に其側にある眞言寺の境内に足を入れました。するとその本堂の前にある地藏尊やお大師の祭つてある前に、來るは來るは、老人と云はず、若者と云はず、男といはず女といはず、様々な階級の人たちが入り替りたちかはり、來ては小さい蠟燭を澤山たてゝ、咀文をとなへては拜んでゆきます。何か様々な願ひがあることなのでせう。あのにぎやかな千日前の寺でも多くの人たちが集つて現世祈禱のために祈つたりお籤をひいたり大繁昌であります。天理教、金光教、何々教全て大繁昌であります。家を變る時には方角を見て貰ひ、悪い方角に立つて行くためには封じの祈禱をして貰ひます。病氣平癒、家運隆盛のためには様々な神や佛をかつぎ出します。方角の善悪、日柄の吉凶それを知らない者を愚者だとされてあります。台所をのぞけば大抵の家にカマドの神様が祭つてあります。かうした迷信に投ずるためには、新聞が運勢判斷をのせます。驚いたのは私の買つた博文館の當用日記すら、民間信仰吉凶歴をのせてゐます。果して人間は、一白水星二黑土星三碧木星……八白土星九紫火星と九通りのホシで運命が定まるのでせうか。

我等はかゝる考へ方や信念を一言にして迷信だといひます。人間はかくまでも迷信なくしては生きられないのでせうか。

然れば何故にかくの如く文明の極度にまで開發した都會に迷信がかくまでは生れるのでせうか。

私は先づ『教育のないため』と第一の理由をあげないではゐられません。人は教育を受けない限りいくら都會に住んでゐたつて、何時までも無智のまゝでゐます。百万二百万と集つて唯毎日を奮闘してゐる人たちには、村落や町や、小都市に比較して教養を受ける機會が極めて少いのであります。田舍では寺院の説教や種々なる教育機關、會合の機會等がありますが、大都會にはそれがないといつてよい。若し出席するとしてもそれは極く少數の特志家であります。

導かれない大衆たちは、勝手に神や佛の靈驗あらたかなりと聞くにまかせて、稲荷にお大師に觀音様に馳せ集つて銘々の願ひを滿足しやうとします。

迷信は水氣のある所に草がはえ、營養のある所、そこにバクテリアが發生するやうに、人間苦の

ある所そこに必ず發生します。そしてそれはこれを滅さうとしても決して滅ぶものではないのであります。如何に說明しても唯漫然とさう思ひこまれるのであつて、如何なる努力も無効であります然ればどうするか。それは唯教養によつて正しい信念にまで純化することより外にはあり得ません

釋尊は獨立者であります。天地創造の神、運命の左右神をひき破り、日の吉凶を打くだいて『日々これ好日』を提唱し、方角の好惡なきことを斷言し一切の邪神淫祠を打崩いて、人格本然の上に立つて自覺を表明して自ら佛陀たることを宣言せられました。

釋尊は自らの世界を自ら行歩し、他の何ものにも左右されずに信念のまゝに自由に獨立に道義そのものを濶歩し、久遠の眞如法性を生活し具顯し、一切衆生の上に神通應化して教化救濟されたのでありました。

大乘經典に神秘不思議なる莊嚴が釋尊を說くのは、全くこの自覺せる生活者を讃嘆し象徵し神秘化したのにすぎません。釋尊こそは、最高の道義を實踐し最高の理念を体認した完全の人であつたのであります。經典とはその日記であり語錄であり、その自覺せる涅槃の講說であり、象徵であり、詩文であり、歌嘆であり、讃美であります。彼の三十二相八十種好の相好の如きも完全絕對なる人格の象徵讃美に外なりません。

架空の說話でもなく獨斷でもなく、此處に一個の生活者獨立者があつた。その釋尊をおいては一切はないのであります。釋尊といふ地上に生活せる人から如何なる經典も生れたのであります。

我が阿彌陀佛の如きも、釋尊の自覺をおいて外にあるのではありません。阿彌陀佛の中に釋尊を見、釋尊の上に阿彌陀佛をみるのであります。まことに釋尊こそ、はつきりと兩足で歩んだ、兩足尊であつたのであります。而して佛教史上不朽の地位を持つ龍樹菩薩は十二禮において『阿彌陀仙兩足尊』と阿彌陀佛を歌嘆されたのでありました。

## 釋尊と彌陀

私どもは先づ釋尊と阿彌陀佛との關係を親鸞聖人の信海を通して味つておかねばなりません。

大無量壽經を拜讀する時我等は先づ、耆闍崛山の會座に來會せる万二千の大衆が『一切大聖、神通已に達せり』とあるに驚くものであります。權化の方便を說くを要せない、神通すでに達せる大

聖であります。しばらくはこの大聖の過去及現在の聖德の讃美にはじまつてゐます。

その大聖の來會に臨める釋尊は光顏ことの外巍々として五德の瑞相を現はしました。これ即ち佛佛相念の世界において所謂身心共に彌陀三昧の大寂定に入つて永遠の光に輝きたまひしに外なりません。

この三昧に入つて說かれたのが法藏菩薩の本願でありました。その上卷では全く眞如より來生せる法藏菩薩の因位の大本願をときました。そして下卷ではその成就されたる佛國土に願生すべきことを說きました。

まことに阿彌陀佛は所說であり釋尊は能說であります。常の釋尊は法を念じ法を說く釋尊であるが、大經においては佛を念じ佛を說きたまふ佛であります。

阿彌陀佛は其本願に『至心に信樂して我が國に生れんと欲へ』と誓ひました。即ち欲生我國と誓つたのに對して釋尊は『願生彼國』と說く。一は理想の彼岸に立つて欲生我國と一切衆生を招喚し一は生死の現實に生きて『願生彼國』と發願し咨嗟します。一つは救主であり、一つは教主であります。

我等は釋尊が大經においては、一切衆生と共に彼國に願生せんとせられる態度を拜しつゝも更に釋尊を久遠の本佛の願海に浮べる還相の人として、阿彌陀佛との一体を信ずるものであります。

即ち親鸞聖人は和讃に、

『久遠實成阿彌陀佛
　五濁の凡愚をあはれみて
　釋迦牟尼佛としめしてぞ
　迦耶城には應現する。』

と詠まれました。即ち釋尊は久遠の本佛、阿彌陀それ自身の應現である。一体であることの信念の告白であります。まことに阿彌陀佛なる佛格は釋尊と一ならざる佛格にして、同時に釋尊の先驗的佛格であります。淨土教が後世限りなき發展をとげて、地に生滅する應現の釋尊を廢立して、超えて其根本佛格たる阿彌陀佛に歸命して本尊の聖壇に拜んだのは釋尊を捨てたのでなくてこれを超えて、限りなく釋尊と等しく彼佛と一体の大心海に歸入して、人格の絕對開放、絕對獨立の道義に永遠に生きんがためであります。（つゞく）

# 轉換期に於ける信仰狀態の心理學的考察

吉藤智水

『當流には信心を以つて本とせられ候』とは淨土眞宗を信ずる者にとつての金言であり絶對の妙境である。此の信心の世界の如何なるものであるか、如何にして入信すべきかに就いては眞宗學の專門的立場から說明せられるべきであつて、その複雜極りない理論の存在することは云ふまでもないことで到底我々には說明出來るものではないがその入信の狀態を、心理學的立場から極く簡單ではあるが、考察して見たいと思ふ。

淨土眞宗信仰一点張りで突きすゝんで行く者にとつて、宗教學、宗教哲學、宗教心理學、其他、等々の學問的考察は無用の長物でもあり得るのであるが、少し眼を見開いて諸種とこれ等の學問的



立場へ耳を傾けることも全然不必要なことではないと我々には思はれる。だから我々に云はしむればさうした學問的立場からの批判に耳を傾けることは自己の信仰內容を一層意識的に明解ならしめることになる樣に思ふ。その勞作は恰も親鸞聖人が『學問せばいよ〳〵如來の恩德の廣大なる旨をも存知し云々』と仰せられて學問することに依つて益々宗教的信仰の確立と洗練とが出來上つて來ると仰せられた心持を体驗することにもなる。

もつと別の方面から云へば、宗教を否定しつゝある現代思想に對しても、眞宗徒は大いにその批判の聲を理解することに務めなければならず、又一方には自己の信順する理論への再認識も深めてしつかりしなければ何時まで立つても、動搖はまぬがれないのみかたま〳〵獨特の名技を振るつても却つて物笑ひの種となることは勿論は社會的罪惡を構成してゐることもあるのである。此の意味に於ても、宗教の心信狀態を心理學的に考察する勞作も百パーセントの徒勞ではない。

宗教信仰の經路を心理學的に考察すると云ふことは、主として心理學上から宗教の信仰の心理狀態をこまやかに分折して研究することを云ふのであつて、心理學上からは、さう云ふ研究を『信仰

の恍惚狀態の心理學的說明』と呼んでゐる。少しくはしく知りたい人はアメリカの心理學者ウイリアムゼームスがエリンバラ大學で講じた『自然宗教に就て』や近代心理學の建設者ウイルヘルム・ヴントの著書を求めて參考に見るとよく判る。日本では帆足利一郎氏のものが大衆的には好評があるらしいが、心理學者として、特に宗教心理を探究した人としては、西澤氏あたりは比較的新進の人と云はなくてはならない。

私は心理學者では勿論ないが、一學徒の立場から特に宗教の心理事象を、さうした專門的の立場から研究する人達の教へに對しては少からず益する点があるのでこゝに少量の省察を述べて讀者の研究資料に供したい。勿論讀者の中には既に研究濟みのお方もあらふし又もつと別の立場から、宗教心理學の無價値を叫んで、次號に於て反駁論を發表せられるお方も二、三はおありであると思ふがそのことは兼ねて承知して書くのだから、其節は大いに教へに預りたいと願つてゐる。

先に信仰狀態を說明する處に心理學的勞作があつてそれを述べると云つたが、信仰狀態とに、普通には、

法悅の狀態
信心の狀態
隨順の狀態
安心の狀態

等々と呼ばれて居るもので、別に『靈感』と表現することもある。

眞宗にも求道の旅に出てから五十年間も寺參りをしたものが容易に信一念の世界に往生することが出來ないのに、却つて若い青年男女の方が先立つて信心を獲得して喜ぶといつた風にあながち年が多くて寺參りの度數が多いから得られるのだと云ふことを裏切つてゐる傾向も見える。又宗教講演や說教の席に一度ものぞいたこともなく、他の求道者をのゝしつてゐた人がたまに熱烈な宗教師の言葉に感動して一席の講演、或は一言の師語に入信するやうなことも少くない。此等の樣々な狀態について考へると、どうして入信出來たのか、又不信心の人はどうしたら信仰に入れるのかと凝念を起して、懸命に信仰書を讀み、講話を聞くのであるが、心理學上から考察すると、決してさう

いふ具合に氣に掛けて求め〳〵るだけでは宗教の信仰に入られるものではない。

信仰に入るには二つの要素を必要とする。

先づ自分の意識が覺醒意識でもなく無意識でもなく、その中間の半意識狀態、即ち意識狀態が、うとり〳〵してゐる狀態を必要とする。講演を聞いてゐる時の自己を、客觀的に見ると如何にも自分は冷靜の狀態であり得るかの如く考へらるけれ共多くの場合決してさうでない。講演者が、暗い〳〵人生の事實を羅列して益々聽衆者の心理狀態を、重壓して妙な世界に誘導したり、大變痛快に講演式なる雄辯を以つて即興に一座を恍惚ならしめる時の大衆の心理狀態は正に覺醒意識と無意識狀態との中間をさすらつてゐる時である。その時には聽衆の心理は講演者の自由になるもので、大衆の鋭い批判の眼(即ち覺醒意識)は、一時姿を消してゐるのであるからいくら阿片をのまされてもちつとも判りつこなしに、阿片的觀念が經驗的に個定觀念となり、遂には如何なる名論卓說も、その個定觀念が受入れなくなり獨斷におち入るのである。それで甚だしく進んで個定觀念と流動觀念との二重奏が一個の人間に存在するに至り遂に狂人となるのである。



だからもうさうなつたら浮ぶ瀨はない。私の知人の友人に自分の腹中に蛙がゐると信じてゐる者が平素自分は馬鹿々々しいと考へてゐるとは思ひながら、時々腹部の作用で『ガア〳〵』とうなりはじめると最早蛙が又出て來たと云つて氣を惡くする。これなんか誠に常識的に問題にならないが心理學的にはそれを說明する。即ち個定觀念がさう思はしめるのでこれが常に轉變限りなき流動觀念にまで變化せねばいつまでも二重人格として苦しむのである。

半意識狀態の說明で横路に入つたけれども今少し書くべきことは人工的に此の狀態に入る手段として催眠術が存在することである。然し催眠術は宗教的信仰狀態に入る問題と少し邊緣に當るので省略することにしてこゝでは宗教的信仰に入る時の二つの條件の一つとして半意識狀態が欲くべからざるものであることを云つておく。

も一つの條件は吾人の中樞神經に刺戟を與へることである。

中樞神經に刺戟を與へるとは、例へば夢を見る狀態に就て考へる時、夢見る時には何等自分に關係のない事柄を夢見ることは稀で、金儲け、成功、出征、苦痛、飛行機乘り、等々、何れにしても

自己の好都合に行くか否かは別として必ず自分に關連した事柄を夢見る。その時多くの場合自分が望んでゐた事柄を夢見る。『彼の人と逢つて語りたい』と思へば北海道台灣は愚か外國の人と語りながら散歩することも出來るといふ風に、何れも自分が何々したい、あれが欲しい、何處に行きたいと日頃常に思ふ、總括的には意識的要求、或は客觀的事象の意識への刺戟、そのことが即ち中樞に刺戟を與へることに外ならないのであり、たま〳〵平意識狀態と合致して夢の現象となるもので、簡單に云へば半意識狀態とは夢見る時の意識であり、又これに近い意識狀態を云ふのである。

これを伊太利の有名な作曲家タリチニーにその例をとればなか〳〵優れたものがある。彼は日頃懸命になつて美曲を公にしたいと念願してゐたがなか〳〵實現しさふもなかつたが、或る夜彼の夢の中に、異樣な服裝をした人物が現はれて彼のたゝずんでゐる前を向ふに通り過ぎ又後へ返しあちこちしてゐたがやがて亂舞の狀態になつてきた。その樣子に驚異の眼を見張つて唯。惚然として居る殺那、直ちに自分の眼前に來て、汝にこの曲が書けるか？　と云つてあざ笑つた。それを直ちに作曲したのがかの有名な鬼神の曲である。

（以下次號）

# 聖戰錄

## 香川縣

高松市德法寺會主催講演會、十一月五日より三日間、例によつて温い寺内の皆樣にお會ひして面白い三日間を送らせていたゞいた庵治から、阿野さん中山さんが來られる。七日には寺の奥きんや庵地の皆樣や秋田さん等と一緒に栗林公園に出かけて面白く半日遊んだ。八日朝これ等の方々に棧橋まで見送られて出發。岡山市で妹の香月ちやんと一緒になつて、午後五時二十五分急行で東京へ出發。

## 東京市

九日朝八時三十分東京着、これから一週間東京滯在、台正英君の元氣な顏を見る、一しよにすぐ本郷追分町の榮光館に入る。今日からすぐ講演。

## 月島

太子堂善巧寺に於て、夜七時より講演雨、集合あまり多くない。

## 興正寺派

東京出張所、十日午後二時より講演、本山興派の臨時別院で、一年中説教があるが、毎日同じ人が集るのだそうだ。大學生等が托老所だと苦笑させる。都會の寺には托老所多い。

## 横濱、愛友青年會

十一日夜、横濱市久保町、愛友青年會主催講演會、東京支部後藤周統氏前講、こゝの小學校に宮地潛氏がゐられる。この町には本團團員が同氏によつて出來てゐる。震災後出來た街で、佛教など聞いたことがなく、活動や涙花節でなければ集らないといふのに、この夜は大變な成功だつた。眞劍な聞きぶりだつた。後藤周統氏と一しよに東京へかへる。

## 田端、照日堂

市外田端には台正英君が本派の説教所をはじめて照日

堂といつてゐる。古谷君と二人で居住してゐる。十二日午後とその夜二回此處で講演、夜は慶應大學の部合だつたが臨時、中止になつたので、夜もこゝでする。台君の例の一心正念の精進ぶりだから何ものかを此處に生むにちがひない。集つて下さつたお方、特に其中心人物によく今後を賴んでおく。

## 四谷郵便局

十三日夜七時より四谷郵便局の方々に二時間ほどお話する局長小暮馬次郎氏は奮闘努力實踐躬行の人、電燈の節約から、物品の始末から局内全員の活動、修養にまでとても心がけた人である。この局に團員佐藤氏がゐられる。九時郵局を辞してすぐ西善寺へ。

## 西善寺

西善寺の後藤周統氏は東京支部常任幹事だ西川豐三氏(洋大學生)千原大悟氏(仝上)其他と共に熱心にお活動下さる。こゝで東京支部の講演、皆樣が待ちかまへてゐて下さる。すぐ前講諸氏を受けて語る。大變しつくりした會だつた。後座談會になつて夜更けるまで有益な話が出る。

## 龍泉寺宿泊所

東京市所設龍泉寺宿泊所。十四日夜、市がやつてゐる宿泊所には下は無料から上はこゝの宿泊所まで幾通りもある。こゝは一晩二十三錢の料金がいる。食費は別にいる。もと安月給とりを入れて試驗的にやる考へだつたそうだが、今は色々な人が入つてゐるさうだ。失業へ失業へと落ちてゆくのでこゝで、も困りぬいてゐるとのこと。講演後所長大橋博吉氏から都會の貧しい世界・裏面の實狀を聞かして貰ふ。東京の空家四萬軒眞の宿なしのルンペン三千人、乞食の世界の話、大都會の裏面は想像にもまして甚しい樣子である。

## 東洋大學

眞宗會、眞宗講座か何かの後を受けて、十五日午後二時より二時間講演する。東京に來ること今年で五年、昨年が一ヶ年ぬけただけで四回來た。前の古い教室がなくなつて新らしく建つてゐる。親鸞聖人の他力論について語る。あまり話がむつかしすぎたとのこと。

## 帝國大學

佛教青年會主催土曜講演、お二階の講堂である。帝大佛青の集りは今頃段々ふえるとのこと。大乘菩薩道について語る。主事稻葉茂先生にはじめて會つた。團員たちも大分打とけるともうお別れである。帝大の講演がすむと十五日午後十時五十分發急行で、汽車の人となる。多數學生諸君の團歌の聲に送られながら。

## 大阪支部

十六日午前十時四十五分大阪驛着多數團員の御出迎を受けて直ちに十三の弟敬三君の所に入る。支部長脇本氏はこれからつききりである。十六日、十七日二晩、十三山日說教場に於いて講演、盛會であつた。十七日夜十時四十五分大阪發、岡山へ。十八日午前二時四十八分岡山着。此ころ、大元帥陛下大演習御統監のため岡山市に御駐泊遊されてある。汽車より岡山城。後樂園を見れば、不夜城だ。十八日朝より、師範の生徒が二三十名おしよせる。教頭土取氏、三年の主任淺岡先生も來られて夕方まで盛會だつた。

## 米子支部

鳥取縣

十九日午前七時、岡山發、十二時二十分米子市着、直ちに角盤町佐々木源市氏宅に着、十九、二十の二日間、二葉園にて支部講演會、九日發會式をしたままだが、なか〳〵の元氣である。大盛會、こゝより新らしく本部に入つた河本澄弘君隨行、二葉園の主催岡重亮震氏、板垣副支部長、鎌田其他幹事の大活躍のあとがしのばれる。二十日午前、縣立高等女學校において第四學年の人にこの前のつゞきを語る。二時間弱、その後で、大阪の梅花女專校長の歐米視察談を聞く有益であつた。

## 東伯支部

二十一日午前九時二十七分米子發多數の團員と涙の別れをして、板垣副支部長同道、十一時三十分倉吉町に着、小倉忠良氏宅に入る。二十一日、二十二日二日間妙寂寺に於て

講演會、顧問田中滿藤造先生が、支部長にかはつて色々と御盡力、顧問、役員、團則等全て完備した堂々たる陣容である。たつた二日間なのですぐすんでしまふ

## 山口縣

二十三日午前八時十分發、上井の乘客まで數人の見送り、これから途中米子で團員の方々にあつて、山陰線を一路西に島根縣の海岸は狂ふ大波に洗はれて巖のそびえたつ風景は極めて美しい。小郡で乘替へて山口縣厚狹町清水重男氏宅についたのが九時前、風呂に入つて氣持よく休む。

## 於福

安養寺婦人會、午前八時厚狹發、九時三分於福着、二十四、二十五兩日安養寺において講演、この度光明團支部の發會式をとのことであつたが、まだ團員の責任數がないのと、準備が出來てゐないし、青年團方面が來てゐないので延期していたゞく。

## 共和村

二十六日於福村をたつて、別府村を横ぎり共和村嘉萬市の旅館台灣樓に入る二十六、二十七兩日は小學校大講堂で、村教育會主催の教育勅語四十周年記念講演會にのぞむ、講題「大乘菩薩道よりみたる教育勅語の眞精神」二日間共午後二時より二時間、田舍には稀な、八間に十二間の立派な大講堂。二十八日婦人會主催講演會を寺院に於いて開かる。聽衆多數、二十九日、刀彌哲夫氏宅において、晝夜二回講演會、夜は大變な聽衆、刀彌哲夫氏は村産業組合の理事、在郷軍分會長、其父君勘三翁は、村長中村左一氏の父君保一氏、鹿島素彦氏、阿武氏と共に本村の四天王、皆佛教信者、それに十哲があつてまれにみる明るい村だ。確かに舉村一致の隆たる勢が見える。二十九日は一日刀彌で宿らせて貰つて、三十日午後發、厚狹につくと清水氏のすゝむるまゝに豫定變更一泊して十二月一日一ヶ月ぶりに本部に帰る。今日より三日間、本部報恩講である。十一月には香川、東京大阪、鳥取、山口の五府縣を飛びまはつていよ〳〵と教へられることが多かつた。



□主管は十六日山縣郡地方の講演を了へて本部へかへり風呂をあびてすぐ、市外西原の明福寺に講演に行つて夜中にかへりましたが、十七日から風邪、とう〳〵一切の講演をおことはりして十幾日床に入つてしまひました病氣もさることながら、年中の寝不足をとりかへしたといひます。□十七日夜、本部會議、明年度の計畫、本部移轉の件、本部直屬の研究學園の設置、本團の經營方針等々について極めて有意義な會でした。□筒賀支部長廣瀬しげ子樣も病氣で一時大分惡いらしくて本部皆で心配、でももう御全快。□三十一日毎年と異ることなく金欠病の大困り、困つても皆ほがらかなもの米屋の山下軍一君が團員、全君たちに相すまぬまゝで年が來る。□一月一日午前四時、中村五四君が先頭乘込みそれから佛前の勤行、比治山參拜、途中で岡山から來た西日氏と一緒になる。未明の君か代、まことに有意義、かへつて本部で雜煮をいたゞく、新年らしく雪がふる。□一月元旦は日の始め月の始め年の始めだから昔から三始といつて元旦をことほぐが本部ではこれが四始にも五始にもなつた。それは印刷部の佐々木氏が釜瀬氏の姉君、榮さんと結婚、佐々繁白道氏の義弟英雄君が白道氏の奥さんの妹あきのさんと結婚、午後二時から別々に佛式で結婚式をあげて一しよに披露宴をやる。新年早々から芽出度い極みだ。□本年は本年はとて暮れにけり。誰も新年には本年は本年はと出發するが、はじめたことが續かず努力がつゞかず無爲にして一年をすごす。五十年位すぐたつてしまふ。□本團は決してその「暮れにけり」で終つてはならない。本年はきつと何か生れる。やるのだ。□地方の支部でも健全な發展をのぞむ。千年支部が「さもしび」といふ支部の機關雜誌發行、大いに意氣をあげてゐる。□山口縣の明るい村、共和村に刀彌樣の御心配で支部が生れさうだ□鳥取の東伯、米子兩支部では、一月早々釜瀬君を招いて大々的活躍、支部結成ずみでない所はうんとお願ひする。組織と統一がないと駄目、二日から主管は河内町へ。出かける皆樣しつかりお願ひします

# 誌代納附者芳名

（光明の部）

、六〇　高橋末一
一、二〇　美濃しげ子
一　五〇　小田かすゑ
一、二〇　島谷愼三
一、二〇　野田たか
、六〇　清水さの
、三〇　柴田民代
、四〇　小林初生
、四〇　村上よし子
、四〇　濱田さかえ
、三〇　吉岡靜江
、六〇　檀浦輝臣
、六〇　桑田八千代
、六〇　高田とし子
、六〇　濱田晃一
、六〇　佐藤平吉
、六〇　藤井すみゑ
、六〇　國吉ちか
一、二〇　滝山巖
二、四〇　宮松きみ子
、六〇　久保田つる・枝
三、〇〇　中務みつ代
、四〇　福島よれ
一、二〇　荒川様
、六〇　畠本小春
、六〇　小林悅三
二、二〇　平井みれ子
二、六〇　城代重吉
一、〇〇　橋本良一

（聖光の部）

、六〇　井上幸雄

一、二〇　谷川ますみ
一、二〇　佐々木たさろ
一　二〇　齋藤幹雄
、六〇　藤田清一郎
一、五〇　笠岡襄一
、三〇　賴田賴村
一、五〇　瀬尙ます子様
、四〇　濱田眞壽夫
、四〇　村上まさは
、五〇　檀原ふくよ
、三〇　三谷勝三
、六〇　永井貞一
、六〇　曾我好様
、六〇　倉田とき子
、六〇　田頭尊夫
、六〇　佐藤快三
、九〇　杉原きめよ
、五〇　田頭一代
五、〇〇　山田市蔵
、六〇　滿井讓
一、二〇　住田かず子
一、一〇　中重勝
一、七〇　倉本きみよ
、五〇　宮本愛子
、六〇　常森もゝよ
、六〇　岸田末子
三、九〇　楠正壽
一、二〇　玉木八重子
、六〇　水川專太郎

、六〇　村上武次郎
、六〇　村上辻
二、〇〇　岡田繁
、六〇　高橋きくよ
、六〇　森原みゑ子
一、二〇　中務みつ代
、六〇　東岡文代
、六〇　吉岡正道
一、〇〇　行友正子
、六〇　山下鐵雄
、六〇　熊田がれ子
一、〇〇　横山光子
三、九〇　中下光子
一、二〇　小木曾鐵次郎
、六〇　高橋冬子

一、二〇　軀川百枝
、六〇　片山とく
一、二〇　一ノ瀬いく
、六〇　下佐古逸喜
一、〇〇　竹廣貫吾
、三〇　高濱千代榮
一、二〇　池口時子
、四〇　村上むつゑ
、四〇　村上かれよ様
、五〇　佐藤健二
、三〇　三谷らい
、六〇　村上千代美
、六〇　平岡富夫
、六〇　山本久子
二、四〇　池田園枝
一、二〇　佐々木安一
一、二〇　中本みれ子
、六〇　羽原彬次郎
一、二〇　二井淺太郎
、三〇　辻橋富美子
、四〇　馬屋原てるこ
、四〇　村上こさゑ
、四〇　濱田おきぬ
、三〇　馬屋原おとき
、六〇　村上おまき
、六〇　梶原正
、六〇　青山鶴壽
、六〇　小村とし子

、六〇　宮原愛子
、六〇　門田菊衛
一、〇〇　坪田靜子
一、〇〇　伊藤一四
一、二〇　原田弘三
一、二〇　尾上利子
、六〇　藤川貞夫
、六〇　松浦文江
一、二〇　小倉育之助
、六〇　今西清子
、六〇　田中みつ
一、二〇　西川保吉
三、〇〇　三宅春一
拾　圓　柴田直一
、六〇　星野一二

、六〇 木坂勉
、六〇 吉川二良
、六〇 藤井靜一
拾圓 鎌田すゑの
一、五〇 藤井善太郎
一、〇〇 上川泰一
、六〇 辻村たきゑ
、六〇 岩室晴春
、三〇 山田久子
、六〇 森岡醫院
二、〇〇 高山區
、六〇 坂井榮一
、六〇 今岡藤市
、六〇 渡野ふさ枝
、四〇 沖清一
一、〇〇 山根いつゑ
、六〇 川島君子
一、二〇 小笠原平次

一、二〇 高橋誠一
一、二〇 西名清子
一、二〇 坂田豊造
一、二〇 平岡正己
一、二〇 大野喜一郎
、六〇 坪田島太郎
、六〇 小林しづみ
、六〇 字治信子
、六〇 丁田末義
、六〇 三野ふさ
一、二〇 太田道衛
、六〇 前田みね
三、〇〇 宮庄あやめ
、六〇 岡田幸
、二〇 三浦岩夫
一、二〇 佐々木豐子
一、二〇 谷川ますみ
、五〇 笠岡裏一

、六〇 桐生正子
、六〇 小池ふさ子
一、二〇 小笠原修
一、二〇 城代重吉
一、三〇 庄司佐市
二、四〇 西口益雄
一、〇〇 小笠原優
、三〇 戸崎衣子
、五〇 中井菊重
、六〇 中村節子
一、二〇 一色順惠
、六〇 林田義一
、六〇 内藤ゆき
、六〇 小池與三郎
、二〇 道田製材所
、六〇 增田喜代藏
二、四〇 岡本惣一
、六〇 源田ふさゑ

、六〇 佐々木岩夫
、六〇 弓井すゑ子
一、二〇 小林儀助
一、二〇 羽原守雄
、六〇 松森明
二、五〇 吉田吉郎
一、二〇 池田たまの
一、二〇 宮本重代
、五〇 長尾忠德
一、二〇 長井醫院
、六〇 武澤はる
、六〇 高橋松子
、六〇 高木乙松
、六〇 中條正邦
一、〇〇 松本あさ
、六〇 高橋末一
、六〇 西野健二郎


住岡狂風 著

悩める女性の胸に

定價 參拾錢 送料 貳錢

太田隆 著

歌集

青蓮華

定價 四拾錢 送料 四錢

發賣所 廣島市八丁堀二六 光明團本部



昭和六年一月十日印刷納本
昭和六年一月十五日 發行

一部 金十錢（郵稅共）
一ケ年金一円二十錢（郵稅共）

編輯兼發行人 花岡靜人
印刷人 佐々木温三
印刷所 光明團印刷部
廣島市八丁堀二六番地

發行所 光明團本部
振替下關二三〇八番